

# 現代結婚式の歴史

## —リゾートウェディングの誕生に焦点をあてて—

増田 榮美  
Masuda Emi

### 抄録

本論文は、結婚式形式の移り変わりについて、社会背景や家族関係から受ける消費者傾向への影響を分析し、結婚式の歴史とともに、リゾートウェディング市場の誕生について明らかにするものである。

結婚式の歴史を概観する中で、1970年代初めの結婚ブームにより結婚式場の予約が取れなかったり、一般的な結婚式が挙げられない事情があるなど、消極的に選択された個性的な結婚式がリゾートウェディングの原点であることがわかった。その後、リゾートウェディングが消費者のニーズにマッチし、積極的に選択されるようになったことが、まさに市場誕生のきっかけであったことが明らかになった。

キーワード：リゾートウェディング誕生・一般化、リゾートウェディング市場の成立、軽井沢、結婚式の歴史、リゾートウェディング市場の多様化、アーバンリゾート

### 序章

リゾートウェディングとは、いわゆるリゾート地で行う結婚式のことである。では、リゾートとは、どのような場所なのであろうか。『大辞林』によれば、避暑や避寒、行楽などのための土地や保養地のこととあり、『広辞苑』には、保養地とは心身を休ませて健康を保ち活力を養うための土地とある。このことから、人々は心身をリラックスする目的のため現実を離れ、非日常性を求めてリゾート地を訪れるのである。結婚する当人たちの居所や実家のあるエリアとは違う、非日常的なリゾート地で挙式することで現実世界と切り離され、わずらわしい義理に縛られず、少人数のアットホームウェディングを実現できることが利点といえる。先駆者ともいえる軽井沢のほか、昨今人気を集めている沖縄、新しいスタイルとして定着しつつあるアーバンリゾート、避暑地型、高原型リゾートして北海道や那須などがあげられる。

バブル期を経て、時代の流れとともにさまざまな結婚式の形態が編み出されてきた。社会環境や、時代背景により結婚式の様式が多様化し、施設もめまぐるしい変化を遂げている。軽井

沢でのロイヤルウェディングに繋がるロマンスや、タレントの挙式が行われた時代まで遡って昨今までの多様化の流れを追うことで、リゾートウェディング市場がどのように成立したのか、また、どのように展開してきたのかを分析していきたいと考える。

結婚式が、「挙式」という儀式と「披露宴」という祝宴の二つの部分から成るという現在の形式になった戦後に焦点をあてて、社会的背景を分析する中で結婚式に大きく影響を及ぼしたと考えられる事象による時代区分を行い、歴史を概観する中でリゾートウェディングの成立基盤を明らかにする。

「リゾートウェディング」がどのような背景で誕生し一般化したのか、雑誌や週刊誌の特集記事、新聞記事から、結婚式の歴史を考察する。その中で、結婚式を選択する際の結婚をする当事者の志向は、どのような影響を受け変化してきたのかを明らかにしながら検証していく。

## 第1章 恋愛結婚の標準化

### 1. 転機としての皇太子・美智子妃ご成婚

1945年の第二次世界大戦敗戦後、日本は壊滅した経済や生活の中で復興を目指してきたが、1950年に始まった朝鮮戦争特需が終わると、1952年には大量解雇が始まって失業率も高くなり、1957年下期からは「なべ底不況」といわれる不況に陥って国民の生活水準は厳しい状況におかれていた。一般庶民は経済的にも貧しく、相変わらず自宅でひっそりと結婚の儀を執り行っていた。

このような経済不況の中、ひとつの出来事が暗く沈んだ日本を明るくした。当時の皇太子（今上天皇）と妃殿下のご成婚である。昭和33年（1958年）、軽井沢のテニスコートでデートを重ねたお二人がご婚約を発表され、皇太子妃が皇室初めての民間女性をお后に迎えること、恋愛の末のご婚約であったというテニスコートでのロマンスが一般庶民の憧れとなった。

美智子妃が婚約会見に臨んだ服装、ヘアバンドやカメオのブローチ、ミンクのストール、プリンセスラインのワンピースが注目され、いわゆる「ミッチーブーム」が巻き起こったり、お二人がデートを重ねたテニスコートでの写真が報道されるとテニスウェアがファッションとして流行したりしたことから、庶民の憧れの的であったことがわかるが、同時に、この皇室のロマンスが庶民の恋愛結婚への憧れに繋がっていった。

翌年（1959年）4月10日に行われた結婚パレードはテレビ中継され、この時のテレビ視聴者は1,500万人に上った。この年、ようやくテレビ受信契約が200万を突破したことを考えると、大変な注目ぶりであったことが窺える。そして、皇太子ご成婚後、ロイヤルウェディングに憧れた東京のOLたちが、結婚のあてもないのに次々に退職するという社会現象まで起きている。

### 2. 高度経済成長期における多様な結婚式の原型

1957年下期から続く「なべ底不況」から脱却するため、政府は、1960年に「国民所得倍増計画」を閣議決定し、翌1961年からの10年間に国民所得（国民総生産）を26兆円に倍増させることを目標に掲げた。結果的には、驚異的な経済成長率を記録し、国民一人当たりの国民総所得

は7年で倍増を達成する。

1960年代前半は、高度成長期によく入ったところで、所得水準は依然として低い国民が多かった。この頃結婚適齢期を迎える人たちは戦前に生まれており、兄弟姉妹も多いことから、結婚資金は親に頼らず自分たちで賄うというのが一般的だった。

昭和35年の女性の平均初婚年齢は24.4歳であったが(厚生労働省「人口動態統計」年次推移)、結婚式体験談の多くは、大学卒業1年後に結婚、あるいは学生結婚する、など高学歴であっても結婚年齢は低かった。結婚資金が蓄えられるまでしない、のではなくて、結婚資金が足りなくてもないなりの挙式をして、結婚後二人で協力しながら生活していこう、苦労も二人で、という考え方が多かった。

1961年6月号の『婦人公論』に「私たちの結婚式」という特集記事が掲載されている。誌上では4組のカップルの結婚式内容と結婚費用について詳しく紹介している。共通していることは、「親の力に頼らないで自分たちの力だけでやりたい」「少額の貯金を資金にして結婚後の生活をいくらかでも充実したものになりたい」などの希望から、簡素な結婚式を挙げているということである。パーティを会費制にして、食事は供さず、みかん、ジュース、生菓子をごちそうにしていたり、当時流行した「新宿生活館<sup>1)</sup>」や公民館で挙式しているなど、様々な工夫を凝らし費用をかけないながらも満足している様子が窺える。このような新宿生活館での憲法結婚や会費制祝賀パーティが登場している背景について市川(1988)は、この時期の結婚式を支配していたコンセプトが、「つつましく」、かつ「民主的に」であったと指摘している(市川 1988:156)。

先に挙げた新宿生活館での挙式費用は、最低420円(1960年の大卒平均初任給は、16,115円)で、二人だけの挙式の場合は、これだけでできるのである。そのため人気が高く、挙式日時は抽選によって決められた。新宿生活館で費用をかけずに挙式を行いたいというカップルは、ほとんどが貸衣裳のウェディングドレスである。この頃は、文金高島田、角隠しに白無垢、打掛といったいでたちで、神殿での結婚式(以下神前式)を行うのが主流であったが、新宿生活館などで費用をかけずに挙式をしたいという人たちにとっては高値の花であったのだろう。「助けあい」を目的に、貸衣裳という仕組みが生まれたのもこの頃である。

ここで紹介されている4人の新婦は、簡素な結婚式ということもあって、一様にお色直しはしていないが、記事中に「よくあるような両人の中座」という文章があるように、一般的な結婚式を行う人たちは披露宴の中で「お色直しの中座」があったことがわかる。

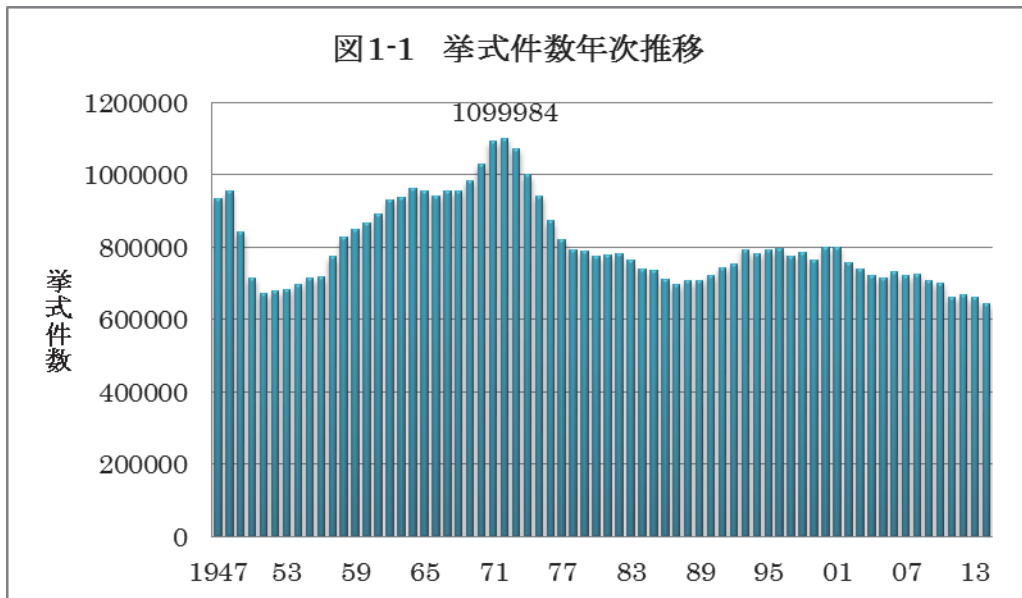
特に、1963年にピークを迎えた集団就職により地方から上京してきた、いわゆる「金の卵」たちは、生活することが精一杯で金銭的な余裕がなかったと思われる。そのため披露宴や新婚旅行ができなくても、けじめとして結婚式だけは挙げ、世間に対する披露の場としていたことが『婦人公論』の記事から読み取れる。色川大吉は、1960年代の婚礼形式の変化を調査するために、ゼミの学生26人の親を対象にアンケートを行った。実際には1963年から1968年までに結婚していた23組が調査対象となっている。それによると、23組はすべて、結婚式を行っており、当時は貧しくても結婚式をしない選択肢はほとんどなかった(色川 1990)。

1964年、第18回オリンピック東京大会が開催され、その経済効果は絶大で経済成長率をさら

に押し上げる要因となった。日本は国民所得倍増計画を推進する中、経済成長率は順調に伸び、1965年10月を景気の谷とし1970年7月を山として57カ月続いた景気の拡張局面、いわゆる「いざなぎ景気」といわれる好景気に沸いていた。

終戦直後の結婚、出産ラッシュで出生率が急増した1946年～1948年は、いわゆる「第一次ベビーブーム」と呼ばれ、そこで生まれた子どもたちは、後に「団塊の世代」と言われるようになる。この団塊の世代が1960年代半ばから1970年代前半にかけて結婚適齢期を迎え空前の結婚ブームとなり、1970年に婚姻組数が100万組を超えると1972年の婚姻組数は約110万組に上った。そのため結婚式場は大変な混みようで予約がなかなか取れないという状況に陥っていた。そのような中、安価で人気のあった新宿生活館が、結婚式場の予約抽選に漏れたカップルを中心に、曆にこだわらないということで人気を集めた。朝日ジャーナル 1964年11月15日号では、「仏滅も避けるなかれ」と題した新宿生活館の結婚式場担当者懇談会が掲載されている。

また、『週刊女性』（1965年10月13日号）では、「流行する“アイデア結婚式”」という特集が組まれており、この中で「式場を探すと結婚ブームでどこにも割り込むすきがない」ことを理由に、飛行機をチャーターして機上結婚式を行ったカップルが紹介されている。



厚生労働省『人口動態総覧年次推移』を参考に作成

1957年に初の女性週刊誌として創刊された『週刊女性』では、1966年に初めて「結婚式場ガイド決定版・全国七大都市」と題して、結婚式場ガイドを掲載した。これは、限りなく用意されている選択肢の中から自分たちの好みや条件に合った式場を選びだすという現在の結婚情報誌とは大きく異なる。当時は結婚ブームで結婚式場の予約が取れないにもかかわらず、他にどのような式場があるのかといった情報を得る手段も他になかったため、結婚式を挙げることができる場所を紹介する記事を掲載するという性格のものだった。このようなことから、結婚ブー

ムによって式場からあぶれてしまうカップルが大変多かったことが窺える。

先に挙げた、『週刊女性』の「流行する“アイデア結婚式”」という記事における東京での500組の新婚夫婦の調査によると、挙式は、神式が72%、教会でが19%、第三位12%が新方式で挙げている。12%を占める新方式の中には、神も仏もない、暦にとらわれないという新宿生活館における結婚式も含まれているものと考えられるが、この誌面では4組のカップルの少し変わった結婚式を紹介している。全体の12%で、変わった結婚式が「流行」といえるかどうか疑問が残るところだが、こうした新方式には「結婚プロデューサー」と呼ばれる人々の影響が見てとれる。

例えば、伊豆の浜辺での「なぎさの結婚式」を挙げた二人は、結婚プロデューサーやまのべもとこ氏のプロデュースによるものである。式場費がかからず、新婚旅行を兼ねることができるといった合理的なところが利点である。新婚旅行を兼ねて、結婚式を旅行のオプションと考えているところは、昨今の沖縄でのリゾートウェディングを選択しているカップルに通じるところがある。やまのべもとこ氏は、「高原の結婚式」やその他新方式による様々な変わった結婚式をプロデュースしており、現代における“ウェディングプランナー”の先駆的な存在であるといえる。

このように、結婚式場の予約にあぶれてしまったカップルの需要に応える形で、アイデア結婚式を紹介する記事が特集されたり、結婚プロデューサーが登場したりするなど、結婚式の多様化につながるシーズがこの時代に生まれている。

1965年には、女性の雇用者が大幅に増加し、初めて家族従業者を上回った。また、女子の短期大学卒就職率が57.4%と初めて5割を超えている。このように、女性の社会進出が進むにつれ、女性が職場や社会活動など男性と知り合う場が拡大し、その結果恋愛結婚が増え、1960年代後半、ついにはお見合い結婚の組数を上回ることになった。

恋愛結婚はお見合い結婚と違い、結婚相手を探す際仲立ちを経ない。このような恋愛結婚が増えたことで、家と家の結びつきや、仲人や両家の親せきへの義理立てとしての堅苦しいしきたりの必要性が薄れ、個人中心の結婚観が広がっていった。その結果、挙式スタイルや披露宴に対する自由な考え方が受け入れられるようになり、これが結婚式形式の多様化につながったといえる。

時代は高度経済成長期であり、列席者の中には新郎新婦の会社関係者が名を連ね、会社の上司や同僚、友人などを招いて盛大に祝宴を催すカップルが増えはじめた。明治記念館の資料によると、1955年には平均列席者数が25人だったのが、1965年には40人、1975年には60人にまで増加している。このように勤務先の列席者が増えたことで、上司に対する義理や、同僚に対する見栄などの意識が働き、様々な演出が受け入れられるようになった。

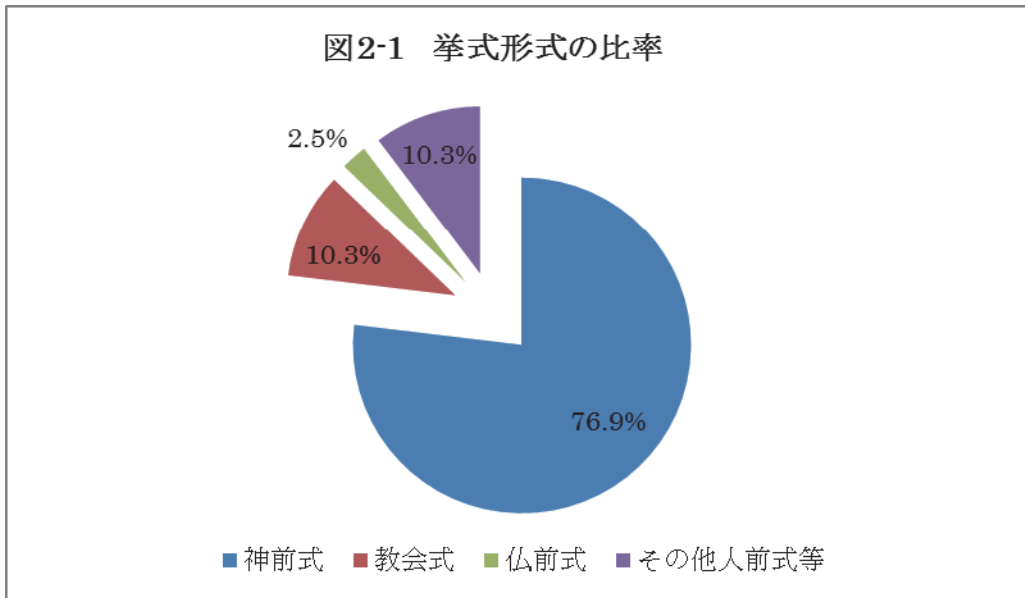
## 第2章 結婚式の多様化へ

### 1. 結婚ブームによる結婚式多様化の動き

1960年を底に景気が上向き始めたことや団塊の世代の結婚適齢期に重なり始めたことで結

婚ブームとなっていたが、いよいよ1972年には団塊の世代の結婚適齢期のピークを迎えることになる。1970年に初めて婚姻組数が100万組を超えてから1974年までの間毎年100万組の大台を維持していた。そのため、依然として結婚式場は混雑し、予約が取り難い状況が続いていた。このような状況の中、結婚したくても式場の予約が取れない、式場からあぶれたカップルのために、いろいろな挙式方法を提案する特集記事が様々な雑誌に掲載されるようになったのは当然の流れだった。

結婚ブームによって結婚式場の予約は全く取れないという状況が生まれ、結婚式を挙げたくても予約が取れずあぶれてしまったカップルによりすでに多様化の兆しが出ていた。そのため結婚プロデューサーが登場したり、相次ぐ有名人による海外挙式や軽井沢での教会式の報道に注目して海外やリゾートに目を向けたり、また、神前式では予約が難しいため教会挙式に着目するようになっていた。やむを得ず海外や軽井沢などのリゾート地に出かけて挙式をしたり、教会式を行ったりしたわけであるが、このことが、挙式多様化の第一歩であり、結婚ブームのピークを迎えた1972年は、様々な動きがあった年である



『女性自身』1973年3月17日号掲載、「結婚調査センター調査」を参考に作成  
 例えば1972年、『週刊平凡』（2月17日号）では、結婚特集を組み、その中で「海外で挙式した“しあわせ”なカップルたち」という記事を掲載している。当時は、神前式が大半で、8割近くを占めていた。ほとんどが神前式を行う中で、同様に神前式を希望すれば式場の予約が取れないため、あぶれてしまったカップルや、悩んでいるカップルに訴えるものであった。

平均的所得階層にとっては海外旅行など手の届く時代ではなかったのであるが、昭和45年に加山雄三がロサンゼルスで、昭和46年に渡哲也がハワイで結婚式を挙げたことで、新婚旅行を兼ねた海外での二人だけの挙式というものが、認知され始めていた。まだまだ僅かなニーズではあったが、ハワイとグアムでの挙式については、すでに日本交通公社が“ウェディング・パッ

ケース”というプランを作って販売していた。そこに目をつけた婚礼衣装専門の貸し衣裳屋であったワタベ・ウェディングは、1972年に、海外店第1号をハワイに出店している。このように、ウェディング業界は国内で挙式が出来なかったカップルのための提案として、海外挙式に目を向け始めていたことがわかる。

日本交通公社で販売していた、ハワイとグアムの「ウェディング・パッケージ」については、前出『週刊平凡』の誌面でも紹介されている。記事中に、「ハワイやグアムは商売でやっている」とあるように、教会での挙式は信者でなくても手続きが簡単であった。グアムの教会で挙式を行ったカップルが、「島で、同じ日に結婚式を挙げた3組の日本人夫婦と知り合った」と言っているように、すでに採算の取れる事業として成立していたと思われる。その後も、『週刊女性』（1973年3月17日号）の「結婚式のアイデア決定版」、(1975年9月9日号)「ハネムーンをかねた二人だけの結婚式」などの記事でハワイとグアムの教会挙式を紹介していることから、この頃ハワイとグアムを中心にした海外挙式の市場が成立したことが窺える。1972年の海外挙式者は約3,000組で、最も集中するのがハワイとグアム島だった。

『週刊平凡』の記事で紹介されている海外挙式は、アムステルダム教会、パリのレストラン、ローマの教会、ユングフラウ（スイス）の教会、デリー（インド）のモスク、ハワイの日本寺院、ハワイの教会、グアムの教会、の8組である。現在のように、海外挙式のシステムや現地でのサポート体制も整っていなかったわけであるから、旅行の手配から挙式の手配までひとつひとつこなしていかなければならず、多くの苦労があったようである。

例えば、アムステルダムにあるオランダで最も古く、由緒ある教会のひとつで挙式をしたカップルは、教会での挙式許可をもらうまでに、何度も日本の教会に足を運んだという。外国の教会での挙式は、ふつう、日本の教会からのしかるべき紹介が必要で、記事の最後には、神父が主催する「結婚講座」を受け、結婚への心構えができたところで海外の教会への紹介状を書いてくれる教会や、日本での宣教師経験のある神父がいる海外の教会を紹介してくれる教会などを掲載している。

海外旅行が珍しかった時代であるから、現地の事情にも精通しているわけではない。パリの教会で挙式した新婦は、ホテルの水道水を飲んで、下痢をして往生してしまったとある。現在の海外旅行では常識とも思えることが、この時はまだ知られていなかったのもあろう。

『週刊平凡』の記事では旅費や挙式料、手数料、食費など、経費を詳しく説明している。これまでは海外での挙式は全く手の届かない高嶺の花だと思われていたが、経済成長とともに生活水準も高くなり、意外に手の届くものになってきたことを告知する目的なのであろう。しかし、どれも非常に金額が高く、誌面で紹介されているカップルは金銭的に余裕があり、長期休暇の取得できるような仕事に就いている。例えば、デザイナーやブティック経営者、会社役員、音楽評論家などである。まだまだ一般庶民にとっては手の届くものではなかった。そこで、手軽に旅行できる国内のリゾート地が注目されるようになったのである。

その流れに上手く乗ったのが軽井沢である。1972年、西郷輝彦と辺見マリが軽井沢の聖パウロ教会で結婚式を挙げた。この結婚式の模様がテレビ中継によって全国で放送され、軽井沢で

の結婚式がクローズアップされることになった。

また、同じ年、聖パウロ教会では、吉田拓郎と四角佳子も結婚式を挙げた。『non・no』（1972年5月20号）には、「吉田拓郎・四角佳子 軽井沢の教会で“結婚しようよ”」という記事が掲載されている。このように軽井沢での相次ぐ芸能人の結婚式が影響し、軽井沢の教会での結婚式、いわゆる「リゾートウェディング」が女性の憧れとなり、この翌年、聖パウロ教会では500組を超えるカップルの挙式を行った。国内の結婚式場で予約が取れず海外に目を向けてみたが費用の面で折り合わない、という状況の中で、相次いで有名人が挙式を行ったことで軽井沢のキリスト教会挙式が注目され、市場が成立していくことになったといえる。

しかし、いくら結婚式場の予約が取れないとはいえ、当時は珍しかった海外や軽井沢の教会式がなぜ注目されるようになったのであろうか。1972年の『週刊平凡』の記事中であるカップルが、編集者の「クリスチャンでもないのに、なぜ、教会結婚式を望む人が多いのだろうか？」という問いに、「そんなことを言うのなら、なぜ、神さま仏さまを信じてもないのに、神前や仏前結婚式を挙げるのですか？」と答えている。また、「ふたりだけでロマンチックな結婚式がやりたい」と両親の反対を押し切って夢をかなえたカップルや、さらには「外国で結婚式といっても教会のお仕着せ結婚式じゃつまらない」といってハワイの日本寺院で挙式した変わり者もいる。このように、団塊の世代は、当時の社会制度や価値観に抵抗した世代であり、新しい生活様式を生み出しただけでなく、個性を追求し、伝統的な価値観にプロテストした世代でもあることが挙式スタイルにも影響しているといえる。『ヤングレディ』（1976年9月14日号）に団塊の世代の特徴として、「お互いをよりどころとして生きようとする二人の人生の始まりの日に、豪華なホテルの結婚式場や、お金をかけた披露宴よりも、朝霧に葉を輝かす森の教会を選ぶカップルが増えている。それは偽造られた形式よりも、本質を大切にしようとする新しいモラルの芽生えといえる」とあるように、団塊の世代による社会や意識の変化が多様化を引き起こしたことが示唆される。また、高度経済成長とともに裕福になりつつある社会の中で、女性の社会進出が進み、自由な思想や発想が受け入れられる時代になってきたことも、新しい挙式形態に影響を及ぼしたといえる。

このような多様化の流れは、消費者側の意識の変化だけではなく、教会側の努力も関係していると考えられる。聖パウロ教会は、薄れた絆を復活させるために、開かれたキリスト教の実践を試み続け、その一環として、非信者のウェディング挙式という道をひらいた。カトリックの紹介を目的として、1960年代から一般に教会を開放し、その結果有名人の挙式が相次いだ。これを皮切りに、各地の教会で、宗派を問わずクリスチャンでなくても「結婚講座」を受けることで挙式が可能になったのである。このことは、キリスト教会式が単なる憧れではなく、ひとつの選択肢として認められていく、大衆化への第一歩であったことは間違いない。

『non・no』（1972年9月20日号）では、「森の花嫁さん」と題して、旧軽井沢の聖パウロ教会を舞台にウェディングドレスを紹介している。聖パウロ教会での様々なシーンにおいていくつかのドレスを紹介しているのだが、それだけに留まらず、キリスト教会式での式次第についても、挙式シーンに合わせて説明している。『non・no』（1973年9月20日号）でも、教会での挙式につ



いて、式次第が詳しく書かれており、当時は神前式が主流であり、教会式について一般的に知識がなかったことがわかるが、これは、教会式の一般化へのプロセスであるといえる。

さらに、1970年代に入ると様々な雑誌、週刊誌で、次々と全国の挙式可能な教会を紹介する特集が組まれており、この段階を経て教会式が認知されていった。

このように、情報伝達手段が豊富でなかった時代においては、「有名人が軽井沢の教会で結婚式をした」という事実だけでなく、それに伴うテレビ中継や、雑誌や週刊誌からもある程度の影響を受けているのではないかと考えられる。

結婚ブームによって結婚式場探しに苦労した人々の中で、やむを得ず一般的な結婚式を行わなかった人々は、海外挙式や、軽井沢などのリゾート、あるいはキリスト教会式といった新しいスタイルを生み出した。その一方で、これまでの結婚式をより豪華にみせる披露宴が流行するという、「演出方法の多様化」が始まった。

『ヤングレディ』では、1973年、1974年に「人並み以上の結婚式」という特集を組み、披露宴に関わる様々な費用について、データを基に平均値を出して豪華に見せる方法を紹介しており、1975年にも、結婚式を豪華に見せる工夫を紹介している。

高度成長を支えている団塊の世代が結婚適齢期を迎えたことで、広く結婚を披露することで社会的立場を強固なものにしたいという形式や見栄にとらわれている背景と、女性が社会進出したことで、新婦側の社会的なつながりも大切にしていくという傾向が強まり、列席者が会社関係者を中心に増え、披露宴は徐々に豪華になっていったと考える。2章にも示した通り、披露宴列席者が1965年の40人から1975年には60人と、10年間に1.5倍になっている。このように、披露宴に会社関係者を招待する人たちは、上司や同僚に対してより豪華に見せたいという見栄がはたらき、自分たちをアピールする効果的な演出を積極的に取り入れるようになったことで、業界側がより派手な演出や高価な衣装、豪華な食事を提供することにつながったと考える。当時話題となったドライアイスの演出やゴンドラでの登場、現代の定番ともいえるお色直し入場時のキャンドルサービスはこの頃誕生している。

## 2. 教会結婚式、リゾートウェディングの一般化

団塊の世代の結婚適齢期が過ぎ、結婚ブームが去ると、1978年の婚姻組数は793,000組余りと、ついに80万組を割り込んでしまう。1980年代に入るとさらに減少傾向が続き、1981年には出生率、婚姻率ともに史上最低を記録し（厚生省人口動態概況）、婚姻数はその後も減少傾向が続くことになる。1970年代後半から女性の社会進出が目覚ましく、1979年には、大手百貨店で相次いで女性を管理職に登用しはじめ、国家公務員採用試験においても女性に閉ざされていた12職種、航空管制官、航空・海上保安大学、気象大学などの受験資格を開放した。このように、女性が社会進出を果たし、大事な戦力として活躍をはじめたことや女性の高学歴化で晩婚化が進み、婚姻率や出生率が低下していくことになった。その結果、結婚式産業の競争を激化させることになり、顧客獲得のため相次いで奇抜な演出を誕生させていった。

表2-1 1970年代～1980年前半の雑誌・週刊誌の教会式・リゾートウェディング記事（筆者作成）

| 年・月・日号         | 雑誌名    | 記事見出し   |
|----------------|--------|---|
| 1972・2・17      | 週刊平凡   | 結婚 海外で挙式した”しあわせ”なカップル                           |
| 1972・4・2       | 女性セブン  | あなたもできる教会結婚式 挙式の進め方からアイデアまで教会結婚式次第              |
| 1972・9・20      | non・no | 森の花嫁さん  |
| 1973・3・7       | 女性セブン  | 海外結婚式の徹底ガイド                                     |
| 1973・3・17      | 女性セブン  | 結婚式のアイデア決定版 いまいちばん多いのは何型か？外国ではどうしているか           |
| 1973・4・14      | 微笑     | あなた出番です！この芸能人夫妻に学ぶ海外での結婚式                       |
| 1973・8・29      | 女性セブン  | もうひとつの新生活スタート術 両親の出席しない挙式法教えます！                 |
| 1974・2・4       | ヤングレディ | 教会結婚式のすべて 準備から挙式までの知識、カップルの挙式の体験報告              |
| 1974・5・20      | ヤングレディ | 超インフレで”2人だけの挙式”が抜群の人気！                          |
| 1975・2・28      | 女性セブン  | 宗教別・結婚式のすべて 結婚式にもたくさんの方が…仏教、神道、キリスト教…           |
| 1975・8・25      | ヤングレディ | 「ステキね」といわれる結婚式の◎アイデア50 人気バツグン、教会結婚ガイド           |
| 1975・9・9       | 週刊女性   | ハネムーンをかねた”2人だけの結婚式”                             |
| 1975・10・9      | 週刊新潮   | 結婚 ホテルが始めた「教会結婚」の若者たち 京王プラザホテルが始めた「教会結婚式」       |
| 1975・11・10     | 週刊女性   | ウェディング・ベルを鳴らし、そのままハネムーンへ 解放された長崎の教会             |
| 1976・3・2       | 週刊女性   | グラビア 教会で結婚式を・全ガイド・北海道から沖縄まで、この教会で挙式できます         |
| 1976・3・3       | 女性セブン  | 結婚特集 幸福への旅立ちのために 海外挙式－教会・費用・手続き－完全ガイド           |
| 1976・5・9       | 週刊明星   | あなたも挙式できる教会結婚式全カタログ 全国教会ガイド付                    |
| 1976・9・14      | ヤングレディ | 2人の出発は2人だけで 森の中の結婚式…軽井沢の森で 恵子・厚郎(市川)さんたちの場合     |
| 1978・9・5       | an・an  | 形式や見栄にとらわれない”教会結婚式”こそ、若いあなたにふさわしい               |
| 1978・11・14     | ヤングレディ | グラビア クルスに誓う永遠の愛 教会結婚式もいいなあ                      |
| 1980・8・19/26合併 | 週刊女性   | 2人だけの結婚式 軽井沢高原教会 挙式した人たちの感動の手記                  |
| 1980・5・15      | 週刊文春   | SPOT 高原の教会二人だけの式を                               |
| 1980・10・1      | an・an  | わたしたち高原の教会で結婚式しました                              |
| 1981・2・24      | ヤングレディ | 軽井沢で結婚式をしたい人へ 軽井沢高原教会                           |
| 1981・9・20      | non・no | 新・ブライダルノート 高原の教会でふたりだけの結婚式                      |
| 1982・9・30      | 女性自身   | グラビア特集 秋の結婚特集 夢みるチャペル・ウェディング 全国29ヵ所、挙式のできる教会ガイド |
| 1984・6         | MORE   | 夢みるチャペルウェディング                                   |

1979年の第二次オイルショックにより、物価上昇を懸念して金融引き締め政策がとられ、日本経済は1980年2月から1983年2月まで36ヶ月に及ぶ戦後最長の景気調整期に入った。その間も3%の経済成長を維持していた。1985年のプラザ合意により一時的な円高不況になったものの、1987年以降は一転して円高好況となり、日本はバブル経済へと向かっていった。このような経済環境の中、結婚式事情も影響を受けていくことになる。

1970年代前半から、数多くの女性誌、週刊誌で教会での結婚式を紹介する記事が掲載されるようになったが、1980年代に入ると徐々に雑誌の特集記事が少なくなり、普及の兆しが感じられる。それでも、80年代前半は特集が組まれていることから、その頃はまだキリスト教会式が一般化の途中で、依然として神道による神前式が主流であったことが窺える。しかしながら、

その一方で、全国結婚式場協会の調査を見ると、1980年代に入り神前式は徐々に減少している。

1963年に「横須賀冠婚葬祭互助会」が誕生して以来、続々と互助会直営の総合結婚式場が登場していたのだが、これらの専門結婚式場やホテルに施されているのは神前式のための施設であり、1970年代の結婚ブーム時は必然的にその様式を受け入れざるをえない状況だった。これは、神前結婚式を積極的に選択しているのではなく、挙式から披露宴までの一連の流れを同一箇所において行うことができるという簡便さから消極的に選択されたものであった。キリスト教会式の場合は、どこかの教会で挙式した後移動して披露宴を行うという、面倒な手間と移動時間がかかったため、簡便な神前挙式を選択する人の割合が高かったといえる。そこに着目した新宿にある京王プラザホテルは、1975年、ホテル内にキリスト教会式を行うための施設を造り、初めて披露宴会場と同じ施設内で教会での結婚式が行えるようにした。京王プラザホテルに設置されたのは結婚式のための教会、いわゆる「チャペル」で、日本独特の宗教活動を全く行わない結婚式専用教会の先駆けである。京王プラザホテルではこの教会結婚式<sup>2)</sup>（以後、教会式）が誕生すると同時に60組の予約が入り、人気を博してヒット商品となった。しかしこの後京王プラザホテルに追随する専門結婚式場やホテルは少なく、チャペルを備える施設が増加して教会式が普及していくことになるのは1980年代に入ってからで、大衆化にはまだ時間がかかることになるが、その頃から少しずつ神前式が減少し始めた。

『週刊女性』（1980年8月19・26日合併号）で、「ふたりだけの結婚式 軽井沢高原教会」という記事が掲載されている。軽井沢のホテルニューホシノ（現 ホテルブレストンコート）の敷地内にある軽井沢高原教会で挙式したカップルの手記をもとにした記事である。ここでは1972年から既に1万組の式を執り行っており、平均すると1年に1,250組もの挙式を行っていることになる。

記事によれば、4割が二人だけの挙式、4割は二人とお友達程度、親族や関係者列席というのは2割となっている。様々な理由から親族に許してもらえず、やむを得ず遠く離れた避暑地で結婚式を挙げていたカップルが8割にも及ぶということである。そして、この内4割に当たる二人だけの挙式をしたカップルが主に記念に手記を残している。それは、子連れでの再婚や妊娠中の新婦、70歳の新郎、ろうあ者同士、国際結婚など、様々な理由から紆余曲折の末結ばれた、いわゆる「わけあり」カップルの結婚式である。現在では問題にならないような理由で両親に反対され、一般的な結婚披露をすることができなかつたため、苦渋の選択として遠く離れた軽井沢で二人だけの挙式を行っていたということがわかる。幾多の障害を乗り越え、両親にさえ見守られることのなかつた二人だからこそ、挙式できたことへの喜びを誰かに伝えたく手記を残しているのである。当時のリゾートウェディングはまだ、わけありカップルの結婚式が主流であったが、残りの2割の親族や関係者が列席する結婚式こそがリゾートウェディングの原点といえる。

当時は、結婚ブームが過ぎ、専門結婚式場やホテル間の顧客獲得競争が激化し生き残りをかけて様々な演出が登場していたころである。そのようなお金をかけさせる結婚式、いわゆる「派手婚」という風潮の中、堂々とお披露目の出来ないカップルたちにとっては、教会の牧師に祝

福されて挙式ができるということはありがたかったに違いない。

一方で、親族や関係者に囲まれての挙式も2割とはいえあるということは、特別な事情がなくても「派手婚」を選択しなかったカップルがリゾート地軽井沢での教会式を行っていたということになる。この傾向は、軽井沢だけでなく、長野県の他の高原型リゾート地でも見られるようになる。

『an・an』（1980年10月1日号）に「わたしたち 高原の教会で結婚しました。」という記事が掲載されている。誌面では、信州の高原の教会で結婚式を挙げたカップルの体験談が紹介されており、高原の教会で挙げる結婚式に人気が出始めたのは、都心のホテルや専門の結婚式場での結婚式と違って、ふたりだけで愛を誓い合うロマンチックなイメージがあるからだと説明されている。「純白のウエディングドレスを着て、高原の教会で結婚式を挙げるのが小さい頃からの夢」とか、「信州にある高原の教会で、両親や親しい友人に祝福されて印象に残る結婚式を挙げたい」などのコメントが掲載されていることから、義理や見栄の派手な結婚式よりも、親しい人だけに囲まれたロマンチックな結婚式に憧れる女性が増えてきたことがわかる。

長野県蓼科にあったホテルグランビュー蓼科の「聖ソフィア白樺高原教会」では、1980年までの過去3年間に約1,400組のカップルが挙式している。ここで挙式している人は、1位東京、2位神奈川、3位大阪、4位愛知、と、関東や関西など都会の若者に人気があることが分かる。その理由として、ホテルグランビュー蓼科の担当者は次のように語っている。

「特に首都圏の場合は、勤務地は東京でも地方出身のカップルも多いんですよ。遠くて両親が呼べないから、それなら、印象に残るふたりだけの式を高原の教会であげようと、考えるようです。とくに女性からの要望が多いですね。また逆に、中間地点だからということで、北海道と沖縄から両親が駆けつけたカップルもありました。」

これは、現在、軽井沢をはじめとしたリゾート地での結婚式を選択する理由と共通している。「リゾートウェディング」といわれる昨今のスタイルはこの頃生まれたと考えられる。教会での結婚式に憧れていたものの、首都圏で教会式を行うには制約があったが、リゾート地では、すでに1970年代から、わけありカップルのための結婚式を行っていたため、教会式のパッケージ化が進んでおり消費者のニーズと上手くマッチした。

高度経済期以降、継続的に都市部へ流入する若者が、このようなニーズを下支えしてきた。また、家と家の結婚式から、結婚式は自分たちのもの、という割り切った考え方を持つ若者が増えてきたことも、高原教会が注目を集めた理由のひとつと考えられる。厚生省の厚生行政基礎調査による1970年を100とした世帯の動向をみると、三世帯世帯は減少し、核家族世帯が急激に増加していることが分かる。当時はすでに核家族化が進み、家という概念が薄れ始めており、親が子供の意見を尊重し自由な発想も受け入れられる風潮に変わりつつあったといえる。

前出の『週刊女性』の軽井沢挙式の記事と、『an・an』の高原教会での挙式の記事で共通していることは、経費がかからない点である。ホテルニューホシノ内の軽井沢高原教会での挙式は、宿泊費込みで9万円のコースと12万円のコースがあり、かなり格安である。また、グランビュー蓼科では、地区別ディナー付宿泊券がついた挙式セットが10万円で、衣裳代以外、挙式に必要な

とされるものはすべて含まれている。三和銀行（当時）の調査レポート『挙式前後の出納簿』によると、当時の1組あたりの挙式費用額は、平均約160万円であったことを考えると、かなり割安であることがわかる。もちろん、招待客の数や内容が違うため単純な比較はできないが、リゾート地で行えば自然と招待客も少なくなり、かかる費用は総額にすればかなり安くなる。

これらの記事から、婚礼が徐々に派手になりつつあった当時、義理にしばられ見栄をはる家対家の派手な結婚式より、自分たちが楽しめることだけにお金をかけたことから結婚式費用は節約したいというカップルが出現し始めたことがわかる。そして、注目すべきは、教会式やリゾートウェディングが一般化される以前から、軽井沢や蓼科の高原型リゾートには教会式用のパッケージプランが存在しており、消費者が利用しやすい環境がすでに整っていた点である。これこそが、一般化につながる大きな要因のひとつであった。

『週刊女性』（1981年3月10日号）には、豪華な挙式に反発するかのようになり、神仏に結婚を誓うのではなく、列席者に誓い証人になってもらう挙式スタイル、いわゆる「人前結婚式」が取り上げられている。当時はまだ馴染みがなかったため、誌面では、シンプルウェディングとして詳しく紹介されている。対談形式のこの記事の中で、4人の女性がみな一様に人前結婚式に驚き、親が納得してくれないだろう、と言っている。このことから、核家族化が進行したことで、親が親戚に対して親としての立場を誇示する場としては婚礼しかなくなっているため、親の「恥ずかしくない程度に人並みにしたい」という意向で結婚式が派手化や形骸化の傾向になっていった理由のひとつであることがわかる。

このように、徐々に婚礼が派手になっていく流れの中で、それに反発したり、流れに乗れない事情を抱えていたりする人たちに対応するように、結婚式の形式が多様化していくことになった。

その後、『non・no』（1981年9月20日号）では高原の教会や白馬のペンション貸し切り結婚式を紹介する記事が掲載されている。「金粉キラキラの親子連名結婚招待状とは何事ですか！……挙式だって披露宴だって個性的な演出が可能はず」とコメントされているように、高原教会でのリゾートウェディングは、まだ個性的な演出のひとつでしかなかったことが窺える。

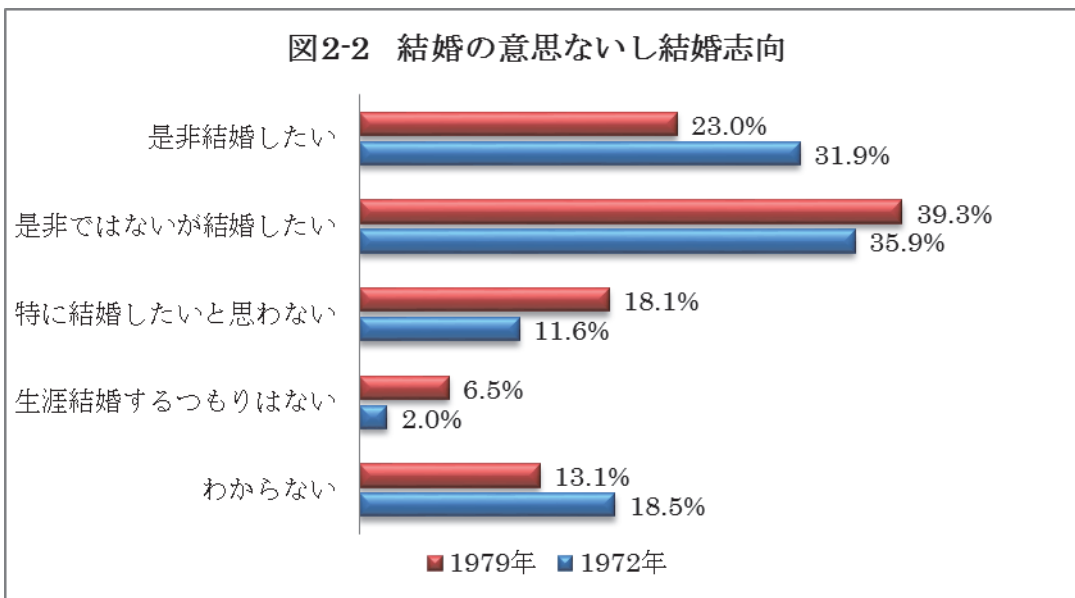
1982年には、『女性自身』（9月30日号）で、「夢見るチャペルウェディング」として、全国の挙式のできる教会を紹介しているが、信者でないカップルの場合は、事前の講座や礼拝に出席することが条件となっており、教会結婚式には面倒な手続きや労力が必要であることがわかる。また『MORE』（1984年6月号）では「結婚式 私のこだわり」という特集記事の中で、高原の教会でのリゾートウェディングを紹介したり、当時ホテルオークラにはチャペルはなかったが、あえてバージンロードを作ってもらって教会結婚式をしたケースを紹介したりしている。これらを総合して考えると、リゾートウェディングはもちろん、教会結婚式も認知はされているものの、まだ一般化はされていない一方で、教会式に対する関心は高かったことが窺える。

このような状況の中、1984年に、依頼があれば式場へ出張しキリスト教結婚式いっさいを引き受けてくれる団体、「ブライダル宣教団」が設立された。23人の牧師が賛同してできたもので、

関東地方57か所の結婚式場やホテルタイアップして、依頼があれば出向いて挙式を行うというものである。前出の記事から読み取れるように、1984年当時、キリスト教会式は少しずつ普及し始めてはいたものの、まだ一般化されてはいなかった。それは、京王プラザホテルのように、施設内にチャペルを設けている所はまだ少なく、教会へ出向いて行わなければならない、手間がかかったからである。しかも、信者以外の人が挙式する場合は、結婚講座や一定期間礼拝に通わなければならない、面倒になって諦める人も多かったはずである。ブライダル宣教団はそこに着眼して、施設内にチャペルがなく牧師が常駐していなくても、ブライダル宣教団の牧師が出向いていくことでキリスト教会式が挙げられるようにしたのである。このことが、キリスト教会式の一般化に大きな影響を及ぼしたといえる。

ブライダル宣教団の活動はその後急速に広まり、1984年の設立当時は年間800件であったものが、1990年には提携ホテルは260件、年間15,000組の挙式を扱うまでになった。そして、この動きに着目したホテルや結婚式場が、施設内に礼拝堂の建設をはじめ、1986年はチャペルの建設ブームになった。

1970年代後半から現れ始めた未婚化、晩婚化は、1980年代に入り、さらに加速していく。1981年3月に発表された1980年の国勢調査の結果をみると、20～24歳の女性の未婚率が、5年前の69.2%から77.9%に上昇し、その後も年々増えていることからその状況が読み取れる。1983年発行の国民生活白書によると、1972年の婦人に関する意識調査では女性の「生涯結婚する気はない(2.0%)」と「特に結婚したいと思わない(11.6%)」は合わせて13.6%程度であったが、1979年の「婦人に関する世論調査」では、女性の「する気はない(6.5%)」と「したいと思わない(18.1%)」を合わせて24.5%と大幅に増加している。また、結婚を望む、「是非したい」と「是非ではない



総理府広報室『婦人に関する世論調査(1979年5月)』を参考に作成

がしたい」を合わせると、67.8%から62.3%のわずかな減少だが、是非結婚したいという女性に限ると、31.9%から23.0%まで大幅に減少し、是非ではないが結婚したいという女性が増加しているのである。こうした人口構成の変化や、積極的に結婚を選択する人が減少するといった結婚観の変化により、婚姻数は益々減少していくことになる。

このように、女性の結婚に対する興味が薄れていく中、それを象徴するように、1980年代後半から、雑誌や週刊誌から、結婚式にまつわる特集が見られなくなっていく。そして、1990年代前半、相次ぐ結婚情報誌の創刊により、その役割を終えた。

婚姻数の減少は、婚礼業界の経営環境を厳しくし、顧客獲得のため、頻繁に改装を行ったり、新しい演出を提供したり、派手な方向へ向かっていく。これは、バブル経済の中、人々の生活が華美になったことや結婚する当人たちの人並みにしたいという世間体も影響しているが、核家族化が進み通過儀礼に対して希薄になる中、親が親戚などに親の立場を誇示できる場は婚礼だけになってしまったことも影響しているものと考えられる。

1988年3月に発行された『結婚式等の現状と簡素化運動』という「あしたの日本を創る協会」が行った調査報告によると、「披露宴のあり方について」の質問に対して、新婚者は、「親が子供の結婚式・披露宴について持っている希望はなるべく叶えてあげたい」が78.9%と最も多くなっているのである。このことから、親の希望を叶えたことによって、派手な演出や豪華な衣装が取り入れられたものと考えられる。また、人並みを望んでいるという回答が60.1%と高く、世間的に恥ずかしくない程度に人並みにしたいという希望があることから、豪華になりえる要素が窺えるのである。

しかし、一方で、「一生に一度のことだから金がかかってもできるだけ賑やかに」したい人は非常に少なく、本来の希望とはかけ離れた結婚式となっている。潜在的には派手にしたくない気持をもっており、それがこの後、バブル崩壊をひとつのきっかけとして、お金をかけない結婚式、いわゆる「地味婚」につながっていくものと考えられる。

### 3. ゲストハウス登場

1991年、バブルが崩壊し、その結果、結婚式や披露宴も経費をかけずに行いたいという傾向が顕著になり、新たな結婚式形態の多様化を生むことになる。

もともと、派手な婚礼を望んでいたわけではないことは、すでに述べた通りであるが、さらに、あしたの日本を創る協会（1988）による調査報告において、「大型の豪華な式を目指すものもありながら、他方ではこじんまりとした個性的な挙式を考えるものへと二極化してきている」と『結婚式等の現状と簡素化運動』の調査報告で指摘されている通り、既にこじんまりとした挙式を選択する土台は出来上がっていたのである。バブルが崩壊したことで、人並み意識や世間体よりも生活実態を反映させた結果だと考えられる。

地味婚には大別して二つのタイプがある。ひとつは、芸能界で流行した入籍のみの結婚、もう一つは規模を縮小して招待客を減らし、派手な演出を控え極力お金をかけない結婚式である。相次ぐ結婚情報誌の創刊によりさまざまな情報が手に入るようになったことから、地味ながら

も自分たらしさを表現できるオリジナル婚の人气が高まった。人と同じような婚礼をしたくないといった人たちのニーズにうまく対応したと考える。また、地味婚希望者が選ぶ婚礼会場としてレストランが注目されるようになった。1992年には、婚礼件数の約10%がレストランウェディングを行っている。

媒酌人の減少傾向もこの頃から始まったものと思われる。2008年に行ったゼクシイトレンド調査によると、媒酌人を立てたカップルは全国平均わずか1%となっている。恋愛結婚であれば必要を感じない、わずらわしい人間関係を好まない、堅苦しくしたくない、お金をかけたくない、規模を小さく地味にやりたい、などの理由によるもので、希薄な人間関係やバブル崩壊といった社会環境に影響されていると考える。

このような社会環境は、軽井沢を始めリゾートの結婚式産業にとっては追い風となった。バブル崩壊後の会社関係の希薄化で、義理での招待をしたくないため、遠く離れたリゾート地で挙式すれば、招待できない口実ができて好都合なのである。

このような地味婚傾向の中、1995年前後に、神前挙式と教会挙式の割合が逆転する(ゼクシイトレンド調査2005)。1986年のチャペル建設ブームにより、教会式が簡便化されたこともひとつの理由といえるが、神前挙式の衣裳は高価なため、より費用がかからない教会式が好まれたことも理由の一つであると考えられる。お色直しの回数も減り、教会挙式であれば、そのまま白ドレスだけで過ごすことも可能なのである。

また、レストランウェディングの人气が高まったことから、列席者に承認になってもらう挙式スタイル「人前挙式」が選択されるようになり、本当に祝福してもらいたい人々に囲まれてアットホームにしたいという意向が感じられる。このようなレストラン人気に着目したのが、ウェディングプロデュース会社である。レストランウェディングの人气は高かったものの、当時のレストランには婚礼の知識やスキルがなく、婚礼ビジネスに必要な業務知識もなかった。そこで、ウェディングプロデューサーが必要になり、プロデュース会社が登場した。

しかし、レストランには親族控え室や新郎新婦の支度部屋などがなく、設備面が不十分であったため、それ以上のシェアを伸ばすことができなかった。そこに目をつけたのがゲストハウスである。

1997年、日本で初めてのゲストハウス(ハウスウェディング)が誕生した。結婚式のみを行う専門式場でありながら、互助会系専門式場とは違い、はじめから神前式を行う神殿は造られていないのが特徴である。これに伴い、一戸建て風の建物を貸し切るための結婚式を行う専用施設が各地に建設され、ゲストハウスブームが起こる。リゾートウェディングに憧れを抱いている人たちの中には、ハウスウェディングが登場したことで、あえて遠く離れたリゾート地で挙式しなくても同じ雰囲気味わえることに魅力を感じた人も多かったものと思われる。ハウスウェディングのシェア拡大に伴い、ホテルや専門式場のシェアは縮小している。

2001年に起きた世界同時多発テロの影響で、海外挙式を予定、検討していたものの、国内リゾートに変更するというカップルが続出した。軽井沢を始め国内リゾートは軒並み挙式組数を増やす。特に沖縄は、これをビジネスチャンスとして活かし、現在の活況につながっていると



いえる。

バブル崩壊を契機として、レストランウェディングやゲストハウスウェディングという新しいスタイルの婚礼施設が生まれた。地味婚と言われたことに象徴されるように、婚礼にかかる費用はバブル崩壊後減少傾向が続いていたが、2002年に下げ止まり上昇に転じている。かつてのような「派手婚」は影を潜めたままだが、こだわったことには惜しまずかける傾向があり、「地味婚」から「オリジナル婚」へと変わってきている。

日本経済が長い不況からようやく立ち直りつつあった2002年、婚礼市場でも結婚式にかかる費用が増大し始める。2007年に、タレントの藤原紀香が生田神社での神前式と盛大な結婚披露宴を行ったことから、再び派手婚の人气が復活し、現在は派手婚と地味婚に二極化傾向になっているといわれている。有名人の結婚式が流行を左右するというのは疑問が残るところではあるが、この後、神前式を選択する人が増えたことから、当時の若者の志向を代表している行動であることが窺える。

情報過多といわれる昨今、結婚情報誌や情報サイトだけでなく、SNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）など様々な媒体から情報が得られるようになってきている。そのため、利用した結婚式場に対する口コミや、成功談・失敗談などの具体的な内容も容易に収集することができ、新郎新婦の持つ情報量が非常に多くなっている。その結果、結婚式に対する期待や願望が膨らみ、今後はこれまで以上にオリジナルにこだわる傾向が強まり、ますます多様化が進むと考えられる。

## 終章

時代の流れとともに社会環境が変化し、それに伴って婚礼の形態は多様化している。経済的に豊かになったことや、結婚する当人の意志が働きやすくなったことで結婚式形態の選択範囲が広がり、その流れの中からリゾートウェディングのニーズが出てきた。

1970年代に結婚式場の予約からあぶれたり、わけありだったりしたことで消極的に選択された個性的な結婚式としてリゾートウェディングの原型が生まれたが、1980年代に入り、リゾートウェディングが消費者のニーズにマッチして積極的に選択されるようになった。一方で、当時の若者が憧れる教会式は、首都圏では不便であったが、リゾート地では、教会式とその後のパーティが同一箇所のできるパッケージ化が先行して進んでいたため、リゾート地と教会式の両方がニーズにマッチし、必然的にリゾートウェディングは一つの選択肢となった。まさにこれが、リゾートウェディング誕生のきっかけである。

また、2001年に起きた世界同時多発テロの影響で、国内リゾートに変更するというカップルが続出し、軽井沢を始めとする国内リゾートは軒並み挙式組数を増やした。特に沖縄は、これをビジネスチャンスとして活かして次々とチャペルを新設し、国内リゾートウェディング市場ナンバーワンの地位を不動のものとした。これが、国内リゾートウェディング市場の一般化と発展、拡大につながったといえる。

このように結婚式形態の多様化の中で生まれたリゾートウェディングであるが、昨今はリ

リゾートウェディング自体が多様化している。首都圏のホテルや専門式場は改装を図り、アーバンリゾートという新しいリゾートウェディングのカテゴリーを形成し、他のリゾートの競合相手となっている。

かつて隆盛を誇った軽井沢は、沖縄にその座を奪われ、その優位性が揺らいでいる。昨今は、利便性や設備を求め、儀式性よりもレジャー性を好み、家族との旅行を楽しみたいという消費者傾向にマッチした沖縄が台頭し、新しいカテゴリーのアーバンリゾートも人気を集めている。今後は、リゾートウェディング市場誕生のきっかけとなった高原型リゾート地、軽井沢について、沖縄やアーバンリゾートとの比較から課題を考察したいと考えている。

本論文は、信州大学経済大学院社会政策科学研究科地域社会イニシアティブコース修士学位論文の一部を抜粋し、修正を加えたものである。

## 参考文献

- 五十嵐太郎, 2007, 『結婚式教会の誕生』, 春秋社.
- 石井研士, 2005, 『結婚式 幸せを創る儀式』, 日本放送出版協会.
- 市川孝一, 1988, 『結婚式の文化的変遷』, 日本家族心理学会編, 『結婚の家族心理学』, 金子書房.
- 井上忠志, 1986, 「結婚風俗の変遷——『神前結婚』を中心に」 端信行編, 『現代日本文化における伝統と変容二 日本人の人生設計』, ドメス出版.
- 色川大吉, 1990, 『昭和史 世相編』, 小学館.
- 坂井妙子, 1997, 『ウェディングドレスはなぜ白いのか』, 勁草書房.
- 志田喜代志, 1991, 『平成結婚式縁起——いまどきのウェディング事情』.
- 増田榮美, 2011, 『リゾートウェディングを志向する消費者傾向の分析』, 上田女子短期大学紀要第34号.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学』, 丸善.
- 昭和58年版 『国民生活白書』 経済企画庁編.
- 電通, 『2008年日本の広告費』, [www.dentsu.co.jp/news/release/2009/pdf/2009013-0223](http://www.dentsu.co.jp/news/release/2009/pdf/2009013-0223).
- ワタベウェディング株式会社, 『2005年海外挙式動向調査』, [www.watabe-wedding.co.jp](http://www.watabe-wedding.co.jp).
- 株式会社リクルート, 『ゼクシイトレンド調査2005, 2008』.

## 注

- 1) 冠婚葬祭の簡素化運動に基づき、1951年に都立（後に区立）として設立された。ここでの結婚式は神や仏に誓うのではなく、館長の前で結婚を誓う、いわば人前式で、挙式後簡素な披露宴を行った。「生活館式」とも呼ばれ、暦（六曜）を気にせず、料金が安いことで人気があったが、1970年代に入り結婚式の盛大化にともなって減少しはじめ、1987年に結婚式の取り扱いを中止した。また同じころ、公民館での結婚式も価格が安いことでポピュラーになったが、結婚式盛大化の中で姿を消した。
- 2) キリスト教会の信者の結婚や、宗教活動を行っている教会での結婚式、いわゆる「キリスト教会式」とは違うため、区別をするために、宗教活動を行わない結婚式専用のチャペルで行う結婚式を「教会結婚式」とした。しかし、この後、キリスト教会式が減少し、教会結婚式が主流になったため、区別せずすべて教会式と表記することにした。